

『半七捕物帳』に描かれた江戸の場所イメージとその構造

— 岡本綺堂が描く江戸の地域 —

川名 禎

The image of place in edo and the structure that it makes

A case of "Hanshichi Torimonochō" by Kido Okamoto

Tadashi KAWANA

はじめに

本稿は、岡本綺堂の時代推理小説『半七捕物帳』⁽¹⁾を題材に、小説が描く江戸の都市空間について地理学的な視点から分析を試みるものである。文学作品を使用した地理学研究は、主に人文主義的地理学の立場から行われてきたが⁽²⁾、それらは従来の地理学が対象としてきた「現実の空間」に加え、「認識された空間」という新たな地理学の地平を切り開いたといえる。歴史地理学の分野で屢々引用されるPrinceの三つの世界⁽³⁾は、「real world」、「imagined world」、「abstract world」のそれぞれが地理学の研究領域であることを提示したものであったが、現実の空間に対する指向性は依然として根強く、後二者に対する研究は未だ立ち遅れているといえるかもしれない。一方でこれらは互いに関連しながら現実の空間を構成しているとみることもできるだろう。かつて水津一朗が唱えた「精神的風土」論⁽⁴⁾は、それぞれの領域を結び付ける理論であったと評価することができる。認識され、表現された空間のイメージは現実の空間の反映でもあるため、認識された空間について知ることは、現実の空間を理解することにもつながるのである。

本稿の目的は、小説に描かれた江戸の都市空間に対する表現を分析することで、岡本綺堂が抱く江戸の都市構造のイメージを理解することにある。筆者は既に『半七捕物帳』の分析を通じて岡本綺堂の江戸情報について明らかにしているが⁽⁵⁾、本稿では、差し当たり地域論的視点から綺堂の描く江戸の空間についてアプローチするのである。

ところで、地理的空間に対する認識のことを、地理学では場所のイメージまたは、場所イメージと呼んでいる⁽⁶⁾。本稿でイメージという場合には、そうした場所イメージを指すものとしたい。

1、岡本綺堂と『半七捕物帳』

『半七捕物帳』の作者である岡本綺堂は、明治5年(1872)に東京の高輪に生まれた。当時の東京は未だ江戸の面影を多く残していたという。綺堂の父親は、かつて幕府に仕えた御家人であって戊辰戦争にも参加をしている。綺堂が育った明治初期の東京の景観も、綺堂自身が「その頃には江戸時代の形見という武家屋敷の古い建物がまだ取り払われずに残っていて」⁽⁷⁾と作品中で記しているように、未だ大きく変わってはいなかった。こうした環境のもとに育った綺堂は、作品を書き上げるうえで江戸のリアルな情感を盛り込むことができたといえる。また、江戸に生きた人の話を直接聞くことができ、江戸の景観の名残を体感することができたという点で、後進の時代小説の作家とは異なった環境にあったということが出来るだろう。とはいえ、公使館に勤務する父親や海外渡航経験のある叔父などの影響もあって、英語にも早くから親しんでいた綺堂は、近代人として東京を生きたのであり、江戸に向けられる視線もいわば近代からの眼差しであったといえる。

劇作家である岡本綺堂が『半七捕物帳』シリーズの執筆を始めたのは、大正6年(1917)の「お文の魂」からで、その後一時の休止期間を経て、昭和2年(1927)の「二

人女房」まで69篇の作品が発表された。当初はシャーロック・ホームズのような探偵推理小説を志向していたが、やがて江戸の情緒を描くことを重視するように作品の性格も変わっていった。こうして綺堂は「捕物帳小説」という新しいジャンルを確立したのである。小説の性格としては、怪奇的要素の強い時代推理小説ということがいえる。内田順文は、「推理小説は場所と最も縁のふかい小説のジャンル」⁽⁸⁾であると指摘しているが、『半七捕物帳』もまた江戸に存在した特有の場所や性質の異なる場所をうまく利用することで多くの事件を作り出している。

2、綺堂のイメージする三つの江戸

『半七捕物帳』における作品の舞台は、幕末の江戸である。江戸は徳川家康の入部以来著しい発展を成し遂げた都市であり、そうした都市の発展が空間的な拡大をもたらし、やがて「大江戸」と呼ばれるようになった。ところが、作品中にはこの「大江戸」という表現をみることはできない。さらに、同じ「江戸」という表現でもそれが示す空間的範囲には違いが存在するのである。岡本綺堂は作品のなかで江戸という空間的枠組みをどのように捉えていたのであろうか。

「…入れ墨者のお此は 江戸へ舞い戻って、浜川の塩煎餅屋の二階に住んでいる」

「…お此は商売の小間物を日本橋の間屋へ仕入れに行くと云って、ときどき江戸辺へでかけるそうです」(妖狐伝)

これらは「妖狐伝」のなかの一文である。ここには綺堂のイメージする二つの異なる「江戸」が表されている。上の文章は、お此が相州から浜川に移り住んだことを、「江戸」へ舞い戻ったと述べていることから、品川の南方に位置した浜川をも含む「江戸」がイメージされている。これに対して下の文章では、日本橋を指して「江戸辺」と呼んでおり、極めて限定的に江戸を捉えているといえる。このように「江戸」の用例には広義の「江戸」と狭義の「江戸」とがそれぞれ存在することがわかる。

このうち特に注目されるのが狭義の「江戸」の用法である。同じ作品中には他に、「お此はさっきここ（品川の宿）を通りましたよ。江戸辺へ行ったのだでしょう」と

いう用例もみられる。竹内誠は、小川顕道の『塵塚談』の記載を挙げて、実際の江戸でも宝暦6年（1756）頃に浅草近辺の者が神田、日本橋辺に行くことを「下町へ行く」、「江戸に行く」といったという事実を紹介している⁽⁹⁾。さらに、文化11年（1814）頃までにはそうした言葉が口にされなくなったことから、その背景にある下町概念の拡大という問題にも言及している。本来あった江戸の位置を示す狭義の「江戸」地名は、恐らく当初の江戸であり、その歴史も古いものと思われる。それに対し広域地名としての広義の「江戸」は、その後の都市の拡大の中で次第に変化していった地名であると考えられる。

このように綺堂の作品にみられた狭義の「江戸」の存在は、決して現実と乖離したものではなかった。しかし、「江戸辺」という言葉はこの作品以外ではあまり使用されておらず、同じ「半七捕物帳」のシリーズでも他の作品では、「江戸辺」のかわりに「江戸の真ん中」という表現を多く用いている。

この「江戸のまん中」という表現について、作品中の具体的な地名をもって示した例に、日本橋茅場町や本郷などがあげられる。ここで本郷が含まれることから、「江戸のまん中」は「江戸辺」の真ん中ではないことがわかる。また、「江戸のまん中」という表現は、「谷中」や「遠い場末の青山辺」などに対比して使用されている例が多いことから、いわば中心と周辺とを対比する上で用いられる表現であるということができる。それらのイメージの質的な違いについては後に検討することとし、ここでは「江戸のまん中」という言葉に含まれる「江戸」について考えてみたい。この「江戸」が狭義のそれではないとするのであれば、広義の「江戸」ということになるが、作品中に用いられる他の「江戸」という表現をみると、必ずしもそうとはいえない。その理由は、「江戸」には「場末」を含むものと含まないものが存在するからである。「場末」を含まない例として、「渋谷といえば、もうお江戸の部ではないのですが」（夜叉神堂）といった表現がみられる。広義の「江戸」の場合は当然「場末」を含むことになるが⁽¹⁰⁾、それを含まないということは両者の中間的存在として、もう一つの「江戸」が存在することになる。実はそれが江戸一般を指す表現であり、「江戸市中」

といわれることもある。単に「江戸」という場合は前述のように広義の「江戸」を示す場合もあるが、「江戸市中」という場合には、高輪と四谷の「大木戸」や「場末」の手前までを指し、「場末」や「近在」は含まない。このように「大木戸」を江戸の境界とみる見方は、以下のような用例にもみられる。

「江戸市中にむやみにはいることを許されませんでしたから、高輪の大木戸を境にして、品川、鮫洲、大森のあたりを遊び歩いていました」(妖狐伝)、

「大木戸を越して、もう江戸へはいったかと思うと、彼女は又少し気が強くなった」(津の国屋)

「大木戸外の事件ですけれども、事柄がすこし変わっているので、特に町方から選み出されたようなわけで」(雷獣と蛇)

このような「大木戸」を境とする「江戸」の存在は、追放刑のひとつである「江戸払い」に象徴された境界認識によるものであるとみられるが、実際の江戸の境界は都市の拡大とともに変化していったのであり、「場末」を含まない「江戸」の用例も、狭義の「江戸」と同様に特定の時代の産物に過ぎないのである。綺堂の持つ江戸のイメージには、こうした異なる時代の「江戸」の境界認識が混在しているといえる。

以上の考察から作品中で語られた「江戸」の範囲を段階的に区分すると(図1)、①「江戸辺」の用例にみられる江戸の中心部を指す狭義の「江戸」(初期「江戸」型)と、②大木戸を境とし場末を含まない「江戸」(「江戸」型)、そして③場末や近在を含む「江戸」(「大江戸」型)とに分類することができる。③については、さらに近在

を含むかどうかによっても分けられるが、その場合は浜川を「江戸」と呼んだ前述の用例のように、他地域との比較において相対的に用いられるものであり、いわば特殊な用法である。いずれにしても、綺堂のイメージする江戸には3種類のタイプが存在しており、それらは実際には異なる時代の産物であったとみられる。何故、同じ作品中に異なる江戸のイメージが表現されたのであろうか、それを綺堂のイメージの混同とみるのか、または場所の記憶の反映として捉えるのか、いくつかの解釈が浮かび上がるが、総じて綺堂の持つ江戸のイメージが静態的であったということは指摘できるであろう。

3、江戸の都市構造と物語の展開

作品における「江戸」の呼称は、概ね各地域の総体を表すものとして用いられているが、つぎにそうした江戸を構成する諸地域の地域区分について、綺堂のイメージを検討してみたい。

江戸における現実の地域区分については、町同士の結合による番組編成が知られている⁽¹¹⁾。しかしながら、それらは行政及び町政運営におけるいわば形式地域であり、一般住民の日常生活において実質地域としての性格がどの程度あったのかは明らかではない。それよりもむしろ江戸切絵図のような媒体が、実態としての地域を巧みに取り入れ、さらには場所に対する認識を再生産させていく役割を担ったのではないかと考えられる。実際に岡本綺堂の、江戸の地域区分に関する認識は、この江戸切絵図に依拠したものであったとみられる⁽¹²⁾。図2は、作品中に登場する岡っ引きの親分や鳶の頭を切絵図のイ

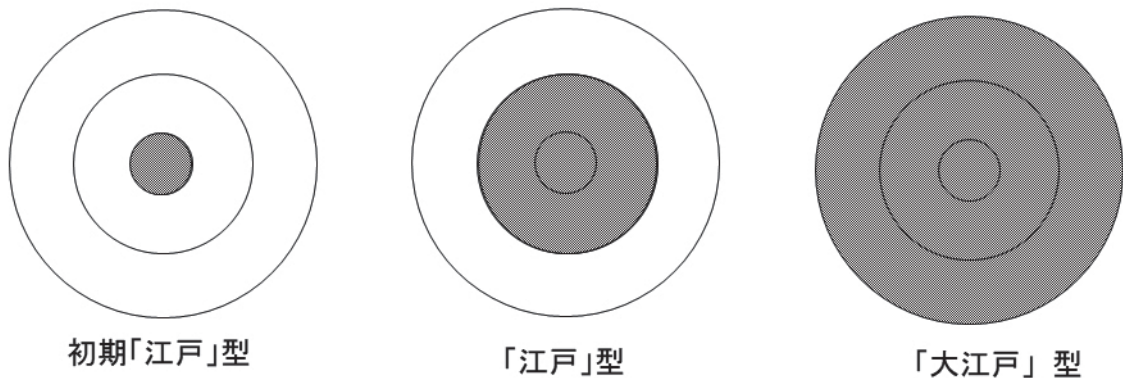
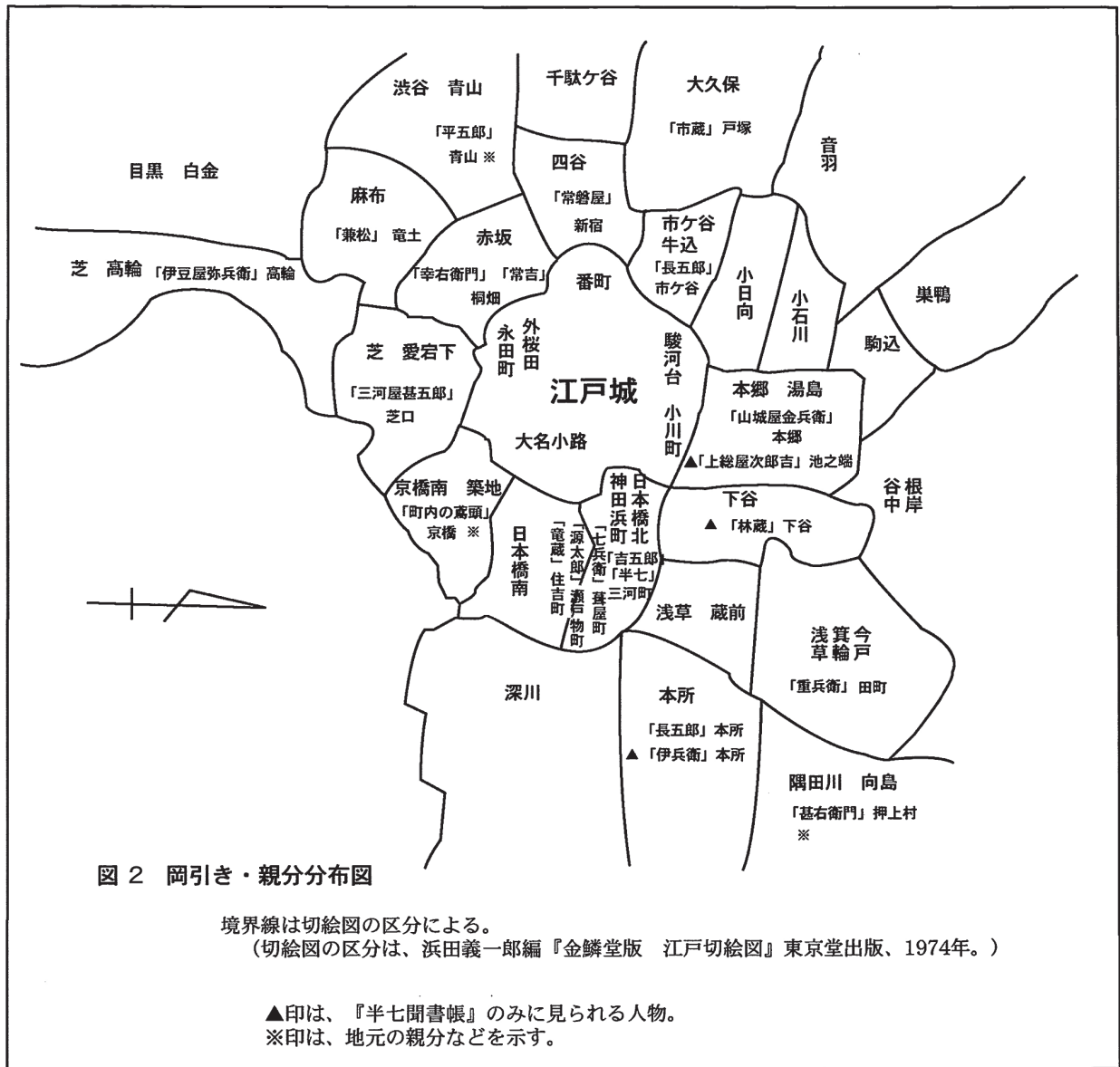


図1 三つの「江戸」モデル



ンデックス上に落としたものである。これによると、親分たちの分布が切絵図の区分と非常によく一致していることがわかる。

切絵図の区分に表現された各地域は、それぞれに個性を持つ固有の地域であり、作品の中でもそうした各地域の性格が物語の展開に重要な役割を果たしている。『半七捕物帳』では、江戸全体を作品の舞台としつつ、各地域の個性を生かした物語が展開されるのであるが、それ故に主人公である岡引きの半七は、自身の縄張りである神田を抜け出し、頻繁に他地域へと越境しなければならないという矛盾を抱えてしまう。これは他の親分など

には決してみられず、主人公の半七のみに認められる現象である。作品の舞台である江戸は、個性的な地域が織りなすモザイク型の構造を基調としており、物語はそれら各地域を繋ぐ役割を持っている。同時に地域相互間の結びつきが生まれれば、半七や子分たちの行動空間も自然と広がっていくことになる。

半七の行動空間における特徴は、その活動範囲が自身の縄張りを越えて江戸全域に及んでいることにある。下町や頻繁に訪れる芝の探索は概ね半日の行程で行っている。これに対し、山の手や江戸の郊外に行く場合には朝から出発しており、概ね日帰りの一日行程で探索が行わ

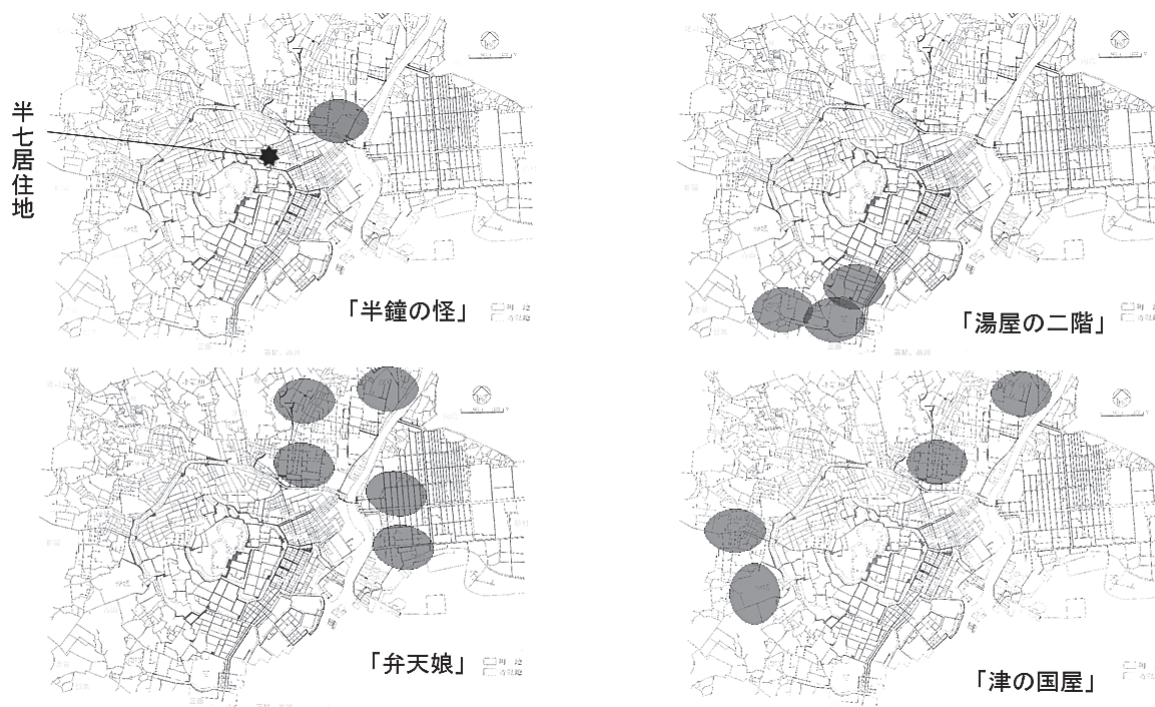


図3 作品の舞台

注) ベースマップは、高橋康夫ほか編 (1993)『図集 日本都市史』東京大学出版会、p194より引用。

れている。つまり、半七にとって江戸の大抵の場所は日帰りで行き来できる範囲にあり、広域な事件にも一応対応できることになる。その反面、事件の解決に至る上で彼の行動範囲を規定する様々な制約に対しては、半七の強靱な身体能力と事件解決の迅速化、そして縄張り外に配された子分達の存在などによって対処されなければならない。とりわけ、浅草方面を担当する浅草馬道の庄太や芝方面の事件にあたる芝愛宕下の熊藏といった子分達の活躍は、広域化する事件に対して不可欠の要素となっている。

こうした半七の行動空間を規定するのは、事件及び物語の空間的展開である。いわゆる前期半七と呼ばれる初期の作品では、物語も比較的短く⁽¹³⁾、事件は単独の地域か隣接地域で完結するものも多い。これに対し後期半七では、分量が増えた分、事件が広域化する傾向をみせ、作品の舞台が江戸全体や郊外にまで及んでいる。図3はそうした事件及び物語の展開を地図に示したものである。「半鐘の怪」は神田の地域内で事件が完結する単独地域完結型のタイプであるが、これは全体からみれば珍しく、多くの場合は「湯屋の二階」の様に、近隣や隣接

する地域のなかで事件が展開する。それらは江戸城を中心としてみた放射状に広がる八方位の各エリアに収まる様な範囲であるが、さらに事件が広域化すると、「弁天娘」の様に四方位のうちの一方位全体に、あるいは「津の国屋」の様に江戸城を挟んで対向する地域にも事件が展開するようになるのである。

このように作品における物語の展開を空間的に分析すると、それらが江戸の都市構造と密接な関係にあることに気が付く。作品を構成する舞台としての江戸はモザイク状の構造を基調としつつ、江戸城の存在により都市の中心は空洞化され、作品の舞台はドーナツ型を呈する様になる。その結果江戸城を中心とした八方位や四方位に対応するような作品の舞台が形成されるのである。さらに物語が広域に展開すると、作品の舞台は江戸の都市構造の影響を受けて、独特の広がりを見せるようになるが、それは江戸城を迂回するように物語が進む「転回型」や、街道を軸に物語が進む「軸型」といった作品の構造を生むことになる。

「青山の仇討」では、佐倉→日本橋→四谷→千駄ヶ谷→青山→品川→大森と物語が進み、それは江戸の東か

ら西に向かいやがて南に回るといふ軸型から転回型の展開をみせる。また「廻燈籠」では、神田→日本橋→芝→品川→高田→雑司ヶ谷→小石川→板橋→練馬→三河島→松戸→王子という様に江戸を転回しながら物語が進んでおり、江戸の渦状構造を反映したタイトル通りの展開となっている。これに対し軸型の作品には、「津の国屋」（八王子→堀ノ内→四谷→赤坂→下谷→浅草）や、「大森の鶏」（川崎→六郷→大森→鮫洲→品川→高輪→下谷→浅草→矢切→千住）などがあり、前者は概ね甲州街道沿いに、後者は東海道沿いに物語の舞台が設定されている。

このように作品が空間上でベクトルを持って展開される理由については、やはり江戸の都市構造が大きく影響していたとみることができよう。加えて江戸時代が徒歩交通を前提とする社会であった点も挙げることができる。これらの作品は、交通手段の発達した現代とは全く異なった物語の空間的展開を持つということがいえるだ

ろう。さらに転回型や軸型といった作品の構想が、読者の地理的知識を考慮し、理解や共感を得やすいシンプルな構造を描くものとして意図されていたという可能性も十分に考えられるだろう。

4、場所イメージにみる中心—周辺構造

つぎに江戸の諸地域を綺堂がどのように評価しているのか、綺堂が描く江戸の場所イメージについて検討する。作品に登場する人物はどれも極端な描写によってその性格の良し悪しが明確に示されており、人物が所在する地域の場所イメージも、その地域に配される人物の性格によって知ることができる。そうした住人特性の分布は、綺堂の場所イメージを間接的に表しているのである。図4は、作品中に登場する「評判の良い」人物の分布を示したものである。集計単位である各地域は江戸切絵図の地域区分を利用している。また、中心部は江戸城及び武

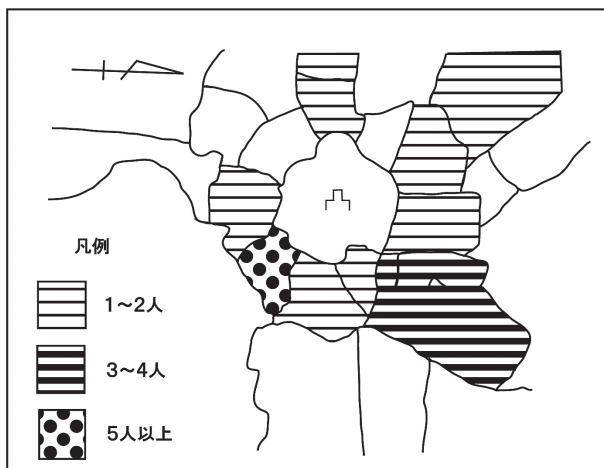


図4 住人特性 評判の良い者

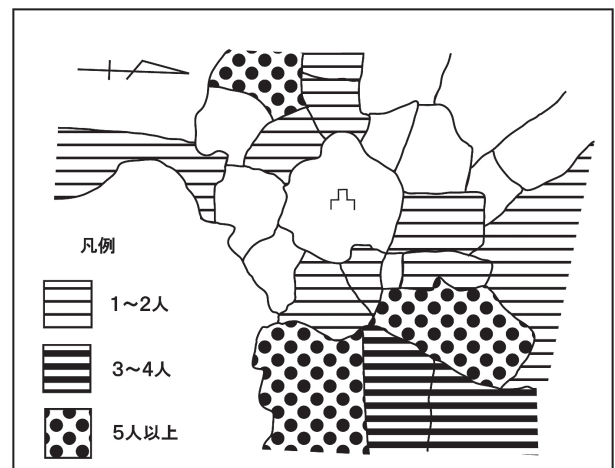


図5 住人特性 評判の悪い者

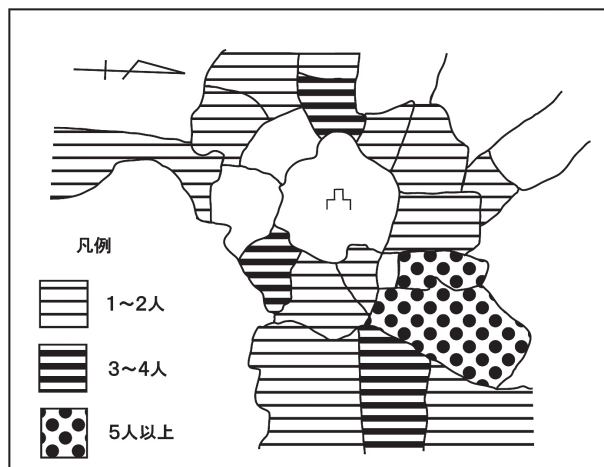


図6 住人特性 道楽者

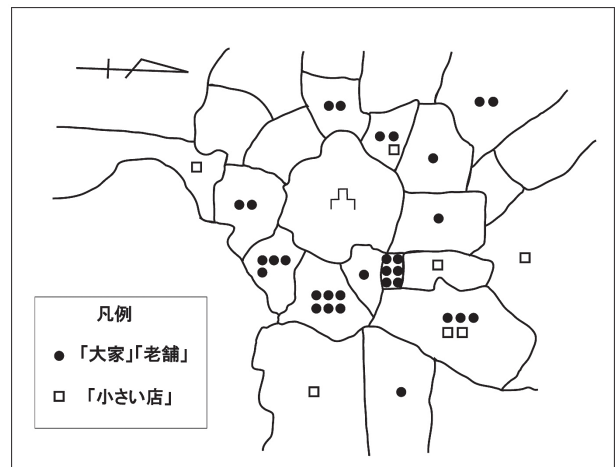


図7 商家の性格

家地の多い地域であるので省略した。その結果、ドーナツ状に広がる二重の地域が確認できる。このうち「評判の良い」人物は、いわば中心を取り巻く内縁の各地域に集中していることがわかる。これに対し、図5の「評判の悪い」人物の場合は外縁に集中していることがみてとれる。つまり両者は対称的な分布傾向を示しているといえる。図7の商家の分布も同様であり、老舗や大きな商家は内縁に、小さい店は外縁に多く分布することがわかる。こうした内と外との対立は、綺堂が江戸の中心部を良い場所とし、周辺部をそうでない場所としてイメージしたもので、中心—周辺構造によって物語の世界が単純化されていることに改めて気が付く。

これに対し、図6の「道楽者」の分布は、浅草と下谷地域に集中するという独特な分布をみせている。実はこの浅草と下谷地域は、小説の舞台として頻繁に登場する地域であり、物語が展開するうえで重要な役割を担っている。それ故に濃厚な意味を与えられた地域として単純化されないという性質がある。「道楽者」には、良いタイプとそうでないタイプとがあり、かつての半七も道楽肌の若者であった。つまり「道楽者」が多いということ自体は、良いとも悪いともいえないのである。また人物の評判についても、良し悪しの両方がこの地域に集中することから、綺堂は他地域に比して独特なイメージをこの地域に抱いていることが窺われる。しかしながら、江戸全体からみると浅草や下谷はやはり特殊な地域であり、中心—周辺というシンプルな構造の中で、各地域の役割が与えられていることに、綺堂がイメージする江戸の特徴を見出すことができるだろう。

前述の「江戸のまん中」と場末との対比もまた中心—周辺の構造になっている。中心を表す「江戸のまん中」の用例として、「華やかな江戸のまん中」、「江戸のまん中の良い席」、「江戸のまん中に化け物なんている筈がねえ」、「江戸のまん中と違って露路の奥が広い」、「江戸のまんなかでは困るので」、「世渡りの手段として、かれは江戸のまん中に祈祷所の看板をかけた」などがあげられる。これらの表現から「江戸のまん中」は華やかで、高級で本格的、経済的にも有利で賑やかな場所としてイメージされている。

一方、綺堂が作品の中で「場末」と表現した周辺の場所は、青山、麻布、渋谷、新宿、音羽などであり、下町にはみられない。そして「場末」のイメージは、「江戸のまん中」とは対比的に、「寂しい」、「人通りの少ない」、「遠い」、「霜が深い」など消極的なイメージを伴う。さらに、そうしたイメージは以下のように「場末」に住む人々に対しても向けられている。

「場末ではあるが、若い時から腕利きで知られた男です」(夜叉神堂)

「場末の稽古師匠が毎日店屋物を取ったり、刺し身を食ったり、そんな贅沢ができる筈がねえ」(帯取りの池)
「場末の師匠にしては内福らしいという噂です」(唐人館)

「場末とは思われないほどに繁昌していた」(夜叉神堂)
「江戸のまん中の良い席へは顔を出されず、場末や近在廻りなどをして」(二人女房)

このように一般的に「場末」の人間は、仕事の質が「江戸のまん中」に比べて劣り、経済力も低いといったイメージで表現されている。さらに、外見からもその違いは明白となる。例えば「江戸のまん中」で見かけられるような、「小股の切れ上がった野暮でない女」は、「ここら(渋谷)の人間じゃない」とみなされ、逆に雑司ヶ谷の人間が、神田の辺りに出れば、「どうも江戸じゃありませんね」といわれるのである。また、食べ物や芸能に関しても、場末や近在では「江戸の人の口には合いますまい」、「江戸のお客の口には合うまいが」、「お江戸の方々の御覧になるような物じゃあござんすまいが」というような評価がなされている。

以上のように「場末」には「江戸のまん中」とは全く対照的なイメージが与えられており、江戸の中心と周辺との対比が明瞭に表現されているのである。この対比こそが物語を展開していくうえで重要な役割を果たしているといえるのである。

5、対立する二つの場所イメージ

複雑な江戸の地域を、中心—周辺のような二項対立の構造で理解する綺堂の場所イメージは、作品の随所において見受けられる。前述の「場末」についても、綺堂が

イメージする「場末」は、山の手奥に集中しているが、それは「山の手」と「下町」という対立軸が中心一周辺構造の位相において存在することを示している。綺堂は「山の手」という地域を決して否定的に捉えている訳ではないが、半七の住む神田に比べて、遠くに位置し、登って行く場所であり、馴染みの薄い別の地域として描いている。例えば、「遠い山の手に行って仕事をする」、「早朝から山の手へ登って」、「久し振りにこっちへ登ってきた」といった表現に窺うことができる。また、登場人物の行動においても「山の手」と「下町」とが対比されている例がみられる。巾着切りなどを働く娘たちは、「下町の方でだんだんに人の眼について来たので、このごろ

は武家の娘らしい姿に化けて、専ら山の手の方を荒らしあるいていた」（雷獣と蛇）とされており、「下町」と「山の手」とが相対化して語られるのである。

また、同じ「場末」の場合でも、「山の手」と「下町」とではそれぞれ意味が異なっており、作品中で「場末」といった場合には「山の手」の奥の方をより多く描く傾向にある。この点から、中心一周辺構造に変化を与える因子として、「山の手」は利用されているとみることができるのであるが、そうした対比も中心一周辺の構造ほどには作品に生かされていないようである。例えば、唐人飴という商売を始めた男が「ちっとは踊りが出来るので、これがよからうと云うことになったが、さすがに江

表1 作品中に表現された都市の音（サウンドスケープ）

往 来 の 音	草履の音、声高な話し声、荷馬の鈴の音、騒がしい、下駄の音、犬のはえる声、鐘の音、呼び出しの太鼓、賑やかな笑い声、獅子の囃子、拍子木、弥次馬の関の声、梟の声、物売りの声、瓦版の読売
横 丁 の 音	鐘の音、唐人飴の鐘と唄
路 地 の 音	「ごとごと」、「がやがや」、「ごそごそ」、「どたんばたん」、転げ落ちる音、足音、鼠の駆ける音、草履の音、表まで響く声、大きな声、壁を崩す音、犬の吠える声、雨漏りの音、鐘の音、コウロギの声、藪蚊の唸り声、三味線の音、溝板を踏む音、籠や盤台を下ろす音、傘の音、人の動く音、籠か藪の鶯の鳴く声、猫の泣き声
町 人 地 の 音	人の立ち騒ぐ音、隣の喧嘩、戸を叩く音、格子を開ける音、屋根を落ちる水の音、戸を開ける音、犬の声、鐘の音、娘の悲鳴、男や女の声、足音、華やかな声、半鐘の音、午祭りの太鼓、六部の鐘、賑わう声、騒ぎ声、梟の鳴き声、猫の鳴き声、物売りの声
門 前 町 の 音	戸を叩く音、女の笑い声、鐘の音、茶屋の客寄せの声
武 家 地 の 音	軽い足音、障子を開ける音、女の泣き声、物音、風の音、鐘の音、眠ったように静か、秋の蝉、虫の声、梟の声
寺社境内地の音	足音、争うような物音、銅鑼の音、風の音、水の音、ひっそりと静まった、虫の声、藪蚊の声、宮芝居の鳴り物、五位鶯が鳴いて、鳩の啼く声、小鳥の声、ゆう鳥の鳴き声、寝鳥のはばたき
茶 屋 の 音	団扇の音、床几の音、男の唸り声、客を呼ぶ声、金勘定の音
旅 籠 屋 の 音	三味線の音、端唄の音
小 料 理 屋 の 音	手を鳴らす音、鯉の跳ねる音、大きな唄声、鐘の音、蝉の声、蠅の音
橋 の 音	水の音、草履の音、人の声、足音、飛び込む音、ざぶんという水の音、船頭の掛け声、雁の群れの鳴き声
空 地 の 音	犬の吠える声、薄のざわめく音、争う音、男の叫び声、女の悲鳴
海 辺 の 音	波の音、怒鳴る音、女の悲鳴

戸のまんなかでは困るので、遠い場末の青山辺へ出かけることになったんです」(唐人飴)という様に、ここでは「江戸のまん中」と「場末」とが対比されているが、結局これは先にみた「下町」と「山の手」の対比と同じ構造を持っており、中心一周辺構造でそれらが代用されているとみなすことができる。

ところで、「山の手」と「下町」といえば、武家と町人との対比がイメージされることが多いが、両地域とそれぞれの身分との関係は作品においてそれほど強調されていない様である。むしろ、武家屋敷と町人地との対比の方が大きく取り上げられているといえる。それは、開放的な町人地に対して、徹底した閉鎖性を持つ武家屋敷という対比である。町方の岡っ引きである半七も武家屋敷には手が出せないため、そこは怪しく暗い空間として描かれている。表1は、作品中に表現される様々な都市の音を景観ごとに集めたものであるが、これをみると武家地と町人地の描写の違いが明瞭である。町人地の往来では、賑やかな喧騒が描写されており、他の町人地でも様々な生活音が大きく響いている様子が窺われる。これに対し、武家屋敷では、かすかな物音や動物の声などにより静寂が表現されている。これらは、「騒」と「静」との対比であり、同時に「開」と「閉」という空間の質の違いを表現したものである。江戸という都市が持つ武家地と町人地という異質な空間の特性を生かして、事件が演出されるのである。

おわりに

以上述べてきたように、本稿では『半七捕物帳』に描かれた江戸の場所イメージのうち、江戸の全体及びその構成要素たる諸地域を中心として考察を行ってきた。その結果、作品中にみられる三つの「江戸」の用法から、綺堂の静態的な「江戸」のイメージが明らかになった。また、江戸切絵図のイメージを元とするモザイク状の諸地域が、物語の展開なかで相互に結ばれ、それぞれの作品の舞台を構成していることをみてきたが、それらが広域化することにより、都市構造の影響を受けて、さらに物語にベクトルが生まれ、転回型や軸型といった作品の構造が生み出されたといえる。

また、物語が展開する上で、異なる性質の場所の存在は欠かせないものとなるが、そうした対照的な場所が二項対立の構造として、作品の世界でイメージされていた。実際の江戸の空間を単純化して極端に対比することは、時代推理小説という性格において有効であったといえる。作品に描かれた場所のイメージは、中心と周辺、山の手と下町、武家地と町人地、「騒」と「静」、「開」と「閉」、さらには自然と文化という二項対立として構造化されることで、物語の展開を導く役割を果たしているのである。

ところで、半七の持つ科学的且つ合理的な思考や、江戸全体にわたる彼の行動空間は、明らかに近代を先取りしている。モザイク状の生活空間を飛び越えて奔走する行動空間の範囲は、明治11年郡区町村編成法による東京府15区や、明治22年の市制に伴う東京市に該当するものであり、これこそが広義の「江戸」にあたるものである。

こうした岡本綺堂が描く江戸の世界は、後の時代小説に踏襲され、我々の江戸イメージに深く刻み込まれている。

【付記】

本稿は、1998年度歴史地理学会大会にて発表した内容の一部に、2018年9月鎌ヶ谷市で開催された“オープンカレッジかまがや”での講座内容を加えて作成したものである。

注

- (1) 本研究では、光文社時代小説文庫『半七捕物帳』全6巻(1990～97年)を使用した。
- (2) 人文主義的地理学(Humanistic Geography)とは、計量主義に対する批判として1970年代頃から提唱された、人間の主観を対象とした地理学である。
- (3) ①Prince, H.C. (1971) “Real, imagined, and abstract world of the past”, *Progress in Geography*, 3, pp1-86.
②有蘭正一郎ほか編(2001)『歴史地理調査ハンドブック』古今書院、p4。
- (4) 水津一郎(1988)『社会地理学の基本問題〈増補版〉』

大明堂、pp201-246。

- (5) 川名 禎 (2001) 「『半七捕物帳』と岡本綺堂の江戸情報—半七は実在したか—」『利根川文化研究』20、pp1-28。
- (6) ①青山宏夫 (1985) 「文学からみた『場所のイメージ』—宮澤賢治『グスコーブドリの伝記』を例にして—」『理論地理学ノート』4、p37、②内田順文 (1987) 「地名・場所・場所イメージ—場所イメージの記号化に関する試論—」『人文地理』39-5、pp391-392。
- (7) 光文社時代小説文庫『半七捕物帳』1巻、p8。
- (8) 内田順文 (1995) 「推理小説の舞台としての場所」杉浦芳夫編『文学・人・地域—越境する地理学』古今書院、p164。
- (9) ①竹内 誠 (1983) 「江戸の地域構造と住民意識」『講座日本の封建都市』第2巻、文一総合出版、p308。②小川顕道著・宮川政運著・神郡周校注(1981)『塵塚談 俗事百工起源』現代思想社、p14。
- (10) 「場末」を含むものには、著者が「場末」と見なす青山の住人をして「江戸の人達」と呼ぶ例や、同じく「場末」と称される音羽の請宿を「江戸の請宿」と表現する例などがある。
- (11) 幸田成友 (1934) 『江戸と大阪』富山房、pp51-52。
- (12) 前掲注(5) pp8-10。
- (13) 前掲注(5) pp17-18。